

「東大教師が新入生にすすめる本」

玉井哲雄（総合文化研究科・教養学部教授／ソフトウェア工学）

『ゲーデル,エッシャー,バッハ—あるいは不思議の環』

ダグラス・R・ホフスタッター／野崎昭弘，はやしはじめ，柳瀬尚紀訳（白揚社，1985）

哲学や文学ならいざしらず，情報科学の分野で新入生にすすめる本として，原著が30年以上前の1979年に出版されたもの挙げるのは，やや意外に感じられるかもしれない．しかし，これは情報科学というような分野の領域をはるかに越える稀有の書である．出版当時のホフスタッターはまだ34歳で無名だったが，本書がピューリッツァー賞を一般ノンフィクション部門で受賞し，一躍スターとなった．

駒場の図書館では，これは数学一般の分類ラベルを貼られている．確かにゲーデルは数学者であり，また現代の計算機科学の基盤となる原理，概念を用意した人といえる．しかし，GEBと略称されるタイトルが示すように，美術のエッシャー，音楽のバッハが三つ巴で語られる．原著の副題は”An Eternal Golden Braid”「永遠の金の組みひも」で，ひもが三つ編みにされているイメージだが，その頭文字がEGBとなっている企みがあるので，訳書ではその語呂合わせまで含めた副題を付けるのを諦めたらしい．

三つ巴の中心を貫く概念は，「自己言及」「自己複製」「再帰」「奇妙なループ」である．バッハのカノンやフーガも，エッシャーのだまし絵も，ゲーデルの不完全性定理と同じ構造をもつものとして論じられる．全体は20章の本文と，章の間に間奏として挟まれるアキレスと亀の対話編という凝った構成である．対話編すべてにバッハの作品をもじった機智にあふれるタイトルが付けられている．

原著も翻訳も800ページ近い大著だが，無類に面白いので一気に読めるだろう．UP誌に紹介したときは「なるべくなら英語で読むとよい」と書いたが，正直に告白すると名訳として知られる日本語版をこれまで直接見たことがなかった．図書館でこれを借りてみて，その翻訳の妙にも感じ入ったところである．